



法の水茎 (53)

大正大学講師 高橋 秀城

いつの間に  
空の景色の  
変わるらん

「新古今集」(国基)  
木枯しの風

「木枯らし」の便りを耳にする季節となりました。「秋冬の風(『八雲御抄』)とも言われる木枯らしは、秋の末から冬の初めにかけて吹く、強く冷たい北風です。草木の合間をヒューヒューと吹き抜けながら、もみじ葉を赤や黄色の秋色に染め上げ、そして散らしていきます。

木枯しの  
風に紅葉て  
人知れず  
憂き言の葉の

積もる頃かな

「新古今集」(小町)  
(木枯らしの風で紅葉するうちに、私の心もひそかに悲しみの紅に染まって、思い通りにならない嘆きの言葉が落ち葉のようには積もる時節よ)

「木枯らし」は「焦がらし」に通じます。胸を焦がす切ない思いは、いつしか憂いの愚痴(憂言葉)となつて積み重なるのでしようか。フツと吐いた長い溜息も、もしかすると木々を紅の涙色(悲しみの秋色)に色づかせてしまいかもしれません。身の回りの冷たさを実感する時期でもありますが、せめて心の中は落ち葉で包むように温かくして過ごしたいものです。「思いやりのない冷淡な心」を、仏教語で「慳貪」

(慳心)と言います。「慳」は見慣れませんが、多くお経に見られる漢字で、「惜しむ」と訓読みします。「何かを人に貸したり、与えたりするのを物惜しみする」という意味です。「突つ慳貪」という言い回しは、慳貪を強めたものですが、必要以上に惜しむ心は、自ずから「刺々しい物言いや、乱暴な振る舞い」となつて表れ出てしまうのでしよう。

また「貪」は「欲深く物を欲しがつて、いつまでも貪り続ける」という意味です。怒りの心(瞋恚)・無知の心(愚痴)とともに三つの煩惱(三毒)の二つに数えられています。

過度に他人のものを欲しがつたり、自分のものを手放さなかつたりする「慳貪」な人は、ともすれば周りに強欲でケチと思われてしまつてもおれませんが、仏教ではこのようにならないよう「不慳貪」(我欲を離れて思いやりの心を持つこと)の教



紅葉のもみじ葉に冷たい北風が吹きつける

えを説いています。「慳貪」をめぐつては、次のような笑い話が伝わっています。

昔、奈良に虫歯を抜く唐人(異国の人がいました。そこにケチで、折に触れては商売の損得ばかりを考えていた金持ちが、

折り折りの記 (87)

波多野 重雄

啄木鳥や羽団扇風に舞ふ落葉

早朝高尾山の六号路を登っていくと、頂上附近の枝の薄い木を叩く音が静寂を破る。近づいて見ると啄木鳥である。

私は暫く立留つて木の下で見ていると、飽きずに木の上部を叩く音調は変らない。ふと、神通力のある羽団扇(天狗風)に落葉は舞ひ上がる。只一途な啄木鳥の仕種は、厳しい冬の到来を知らず警報か。

(高尾山健康登山の会々々長)

八王子宴飲

厚木市 荒井 一雄

乾杯発声大拍手

談笑傾杯満和氣  
食肉食魚皆豁然  
各各歌舞共名妓

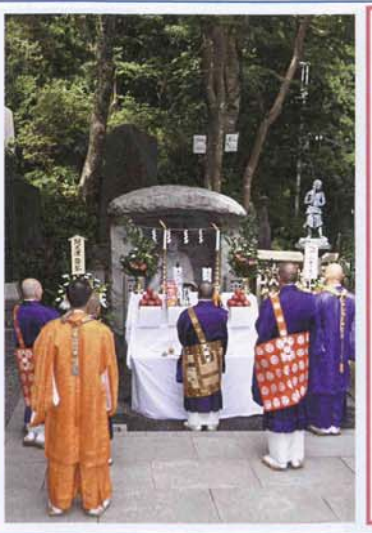
八王子に宴飲す

乾杯のご発声に大拍手…  
談笑し、杯を傾け、  
和氣瀟瀟の雰圍氣に満つ…  
肉を食らひ、魚を食へ、  
皆豁然(心が広々とする)なり…  
各々、歌ひ舞ふ、  
美人名妓さんらと共に…

「突つ慳貪」な感じに腹が立つて、「決して一文では抜かないぞ」と譲りません。

しばらく言い争つていきましたが、全く抜く気がないで、「ならば、三文で歯を二本抜いてください」と頼み込み、虫歯でもない歯と一緒に二本抜いて、三文のお金を支払つたのでした。内心では儲けたと喜んでいても、健康な歯を失つたのは大損でしょう。これは本当に愚かで馬鹿げた行為です。

とは言うものの、世間の人々は利欲を貪る心が深く、つい利益を求めてしまうものです。これから受ける苦報(悪因による苦しみ)を考えず、ただ目の前の「幻の報酬」にのみ心を奪われて、来世への「尊い財」を失い、幸せに向かうための御利益を手にできないことが多いのです。



中興俊源大徳忌法要厳修

十月四日

葉があります。ここに登場する男は、目先の私利私欲に突つ走り、結局は大きな損失を生んでしまったのでした。「沙石集」では、この「慳貪男」を悪い見本として、「素直」で「無欲」、「善い行い」を積んで「誠実」であることの大切さを説いています。

慳貪によつて「この世で得た富(世財)は、いずれは消え去る一時のものですが、「正しい行い」によつて得た富(聖財)は、身体は滅びても、どこまでも寄り添つてくれるのでしよう。

慳貪放逸の者に  
伴う事なかれ。

(伊曾保物語)  
(欲深く、好き勝手な者に、付き随つてはならない)

これは自身の心に向けられた警句でもあるのでしよう。吹きつける風に秋の深まりを観じて、心の潤いまで枯らすことのないようにしたいものです。

(栃木北部教区普濟寺)